平成 26 年度　第 1 回　鶴岡市立藤沢周平記念館運営委員会（会議概要）

○日　時　　平成 26 年 8 月 21 日（木）午後 1 時 45 分～3 時 45 分
○会　場　　東京第一ホテル鶴岡
○審議事項　１　報告
　　（１）平成 25 年度並びに平成 26 年度入館者状況について
　　２　協議
　　（１）第 7 回企画展展示構成案について
　　（２）開館 5 周年特別企画展について
　　（３）その他
○出席者委員
　遠藤展子、遠藤崇寿、湯川　豊、鈴木文彦、栗原正哉、犬塚幹士、東山昭子、髙山邦雄、堀　司朗
○欠席委員
　なし
○市側出席職員
　教育委員会教育部長　長谷川貞義、教育委員会社会教育課長　榊原賢一、
　教育委員会藤沢周平記念館長　鈴木　晃、同館主査　三浦眞紀、同館専門員　成澤万寿美、同館専門員　進藤恵理也、同館嘱託学芸員　齋藤冬華
○その他出席者
　髙橋吉弘、穴澤　亮（運営支援業務受託者）
○公開・非公開の別　　非公開
○非公開の理由　　顕彰する個人の情報を含むため
○報告
（１）平成 25 年度並びに平成 26 年度入館者状況について
　◆内容
　平成 25 年度入館者並びに書籍等販売実績及び平成 26 年度 7 月末現在の入館者並びに書籍等販売状況について報告
　◆質問・意見など
　・『用心棒日月抄』図録のところに網掛けしてあるのは、だいぶ売れてしまったということか。
　→昨年途中で完売し、記録保存用のみとなっている。
　・近隣施設の今年度の入館者状況を把握しているか。
　→大宝館・致道館、市の無料施設があるがいずれも減っている。今年度羽黒山が午歳御縁年の年ということで開祖蜂子皇子の像が 140 年振りにご開帳されたこと、6 月に加茂水族館がリニューアルオープンしたことにより、この２ケ所の来訪者は増えているが、市街地の施設の来訪者は減っている。

○協議

（１） 第７回企画展展示構成案について

◆内容

・企画展名称案：①藤沢周平と庄内の「学」

②藤沢周平と庄内の学問

・会期案：平成 26 年 11 月 7 日～平成 27 年 3 月 31 日

・企画監修者案：犬塚幹士氏、髙山邦雄氏

名称・企画監修者・会期・*展示構成*・ミニギャラリー

・展示コーナー（A～D）における展示構成案を説明

A 部：導入、鶴岡中学夜間部時代の庄内の学び、荘内松柏会

B 部：藩校致道館、荻生徂徠と徂徠学、「庄内学」

C 部：藩校が登場する小説、小説に登場する儒学者

D 部：「庄内論語」、東北振興研修所

◆意見など

◎企画展名について

・〈藤沢周平と庄内の「学」〉とか〈庄内の学問〉では漠然としていて印象深く受け止められないと思う。「儒学」という言葉を使ってはどうか。藤沢さんの儒学に対する関心が藩の教学としてとしての徂徠学だけでなくて、儒学一般に対する関心があるからこそ、髙山さんから受けた薫陶の影響で（藩校や儒学者が）作品の中に登場する。そういう文化的風土、精神的風土、という意味で〈庄内儒学の風土〉とか〈庄内儒学の伝統〉ではどうか。

・具体的に少しでもわかり易くすることを心がけた方が良い。「学」という使い方は止めた方が良い。儒学でも学問でも良いと思うし、きちんと内実のある言葉を使った方が良い。

・タイトルで「郷学」と使うと、非常に地方的な感じがして、普通の人にはなかなか通じにくい部分もあるかもしれない。

・「郷学（きょうがく）」という言葉は一般的ではない。

・タイトルとしては「風土」を使った方が良い。

◎展示構成について

・最初の印象はすごく大事。今回の企画は難しい企画で、これに入館者を惹きつけようと考えた場合、導入部に先生の作品を持ってくるべきと思う。いきなり中学時代の庄内学と言われても戸惑う。作品を A 面の導入部で出して、もう一度 B 面で繰り返しても良い。儒学というものを人に押し付けるのは大変である。やるなら中途半端でなく徹底的にやった方が良い。

・わからないで観にこられる方にとっては非常に難しいテーマであり、ハイレベルなところを狙った企画になっているような気がする。学問的にきちっと詰めていく部分と藤沢先生と土地の人達との交流、庄内文学との関わりなど、少しほっこりしたコーナーがあっても良い。

・荘内松柏会や東北振興研修所、南洲会館など、例会的に勉強会を続けているところとコラボできるような機会があっても良い。

・藩の学風を入口として、壁面ケースで中村氏、髙山氏、春山氏等について、藤沢周平氏

との関係をはっきり説明する、という方法を取った方が良い。実際に、藤沢氏に影響を及ぼした方の業績とか肖像とか本とかを出すことで割合映像化できるし、この機会に一般の人に知ってもらうという風に押し出していく、というのも良い。
・藩校時代の学問が現在も生きている土地柄なので、それを強調したら良いのか、ちょっと分からない。私も今もって論語の講義をしている。そういうことがどういう地域性になるか分からない。
・今も儒学を教えている土地は他にはない。そのことを強調して、その伝統がここまで繋がっているということをやった方が良い。
・安岡正篤先生の本には「郷学」とは、郷土に伝わっている学問、郷土が輩出した人物について学ぶことと書いてあったことから、最初に提案された「郷学」は良いと思った。
・菅原兵治先生の講演録によると、最初に「庄内学」と言ったのは菅原先生であると書かれている。「庄内学」の一番の特徴は庄内に伝わる学問が稲作まで及んだということ。
・面倒を見て教えてくれるような独特の風土があって、その中で色々なことを知識吸収して、小菅留治としても、作家となってからも、作品にも生き方にも現れていたのではないか。だから、地元の人たちとの交流というのは大事なテーマと思うのできちんと取り上げて、それが作品に現れているということが一番大事で、それが企画展の中で一番おもしろく、みんなが興味をもって観てくれるところだと思う。一般的な方が来られても、観終わった後に良かったと思ってもらえるように、難しいテーマでも、入口のところだけは入り易いようにしたいと思う。
・徂徠学と藩校の関係とは短くて良い。むしろ、鶴岡中学時代の庄内の学び、荘内松柏会についてなどをできるだけ詳しく、みんながわかるように出すことによって、藤沢先生の作品にはこういう風土が生きているというのが何となく察せられる。江戸時代はこうだったという抽象的な説明ではなく、それが現在も生きている、という姿を捉えるということが非常に大切と思う。材料は揃っているので強弱をつけてやった方が良い。
・「郷学」という項目をひとつ立てて説明した方が良い。「郷学」の解釈をこの中で行うことは必要である。
・徂徠学が何物かということを是非わかり易く出してほしい。
・儒学という言葉を使うと、すごく学問系列を厳密にやっていかなければならない感じがする。むしろ漢学とか言われた方が一般的でわかり易い。
・「庄内学」という言葉は、今、色々な意味で使われている。会議で議論されている意味のほか庄内を良く知ろう、という意味などでも使われている。
・「庄内学」と言って、荻生徂徠まで遡れるならそれでも良い。
・「庄内学と藤沢先生」と言った場合、「庄内学」を説明する言葉が必要。
◆協議結果
・企画展名については、頂戴した意見を踏まえ、監修者と鶴岡の委員で相談し決定する。
・展示構成については、導入部分に作品をもってくる。作品と藤沢周平氏の生き方に影響を与えた方々との関係と「郷学」という言葉について詳しくわかり易く説明する。

（２）開館５周年特別企画展について

◆内容

・監修者について提案。特別企画展の内容が「直木賞受賞前後」と既に決定していることから、藤沢氏の編集を担当した鈴木委員、栗原委員に依頼したい旨を提案。

◆意見など

・一般に代表作と称されるものが、55 歳から 60 歳にかけて盛んに書かれていると思う。

・「直木賞前後」の前後をどこに設定するのかが悩みどころ。作風的には本人の本の言葉みたいのからすると、後となるのは 51 年ぐらい。転機と言われる『用心棒』『隠し剣』が書かれた年。49 年、50 年あたりで、猛烈に短編を書いている。年間 20～25 本くらい書いて、そこに少し長編が混じってくると思う。転機の前は良く言われる負のロマン。

・受賞後は、暗いといっても結構ユーモアのあるものも書いている。51 年ぐらいになると短編の中にはゆとりが出てきて、めちゃめちゃ短編の完成度が高くなる。

・完成度の高い作品が昭和 51 年ぐらいまでに書かれた。そこまで含めると受賞前後がというのが出てくると思う。厳密に年代は書けない。

・実際に会った編集者を探していくとすると、どのあたりまでできるか。

◆協議結果

・鈴木、栗原両委員を監修者とすることを了承。

・会期については、4 月から半年をめどとする。

・後期については、作品をテーマとする。

・展示構成案を次回運営委員会（11 月中下旬予定）に提示する。